

1 0 . 医学部

生命資源研究・支援センター

エイズ学研究センター

発生医学研究センター

医学部、生命資源研究・支援センター、

エイズ学研究センター、発生医学研究センターの

研究目的と特徴 1 0 - 2

分析項目ごとの水準の判断 1 0 - 3

分析項目 研究活動の状況 1 0 - 3

分析項目 研究成果の状況 1 0 - 7

質の向上度の判断 1 0 - 11

医学部、生命資源研究・支援センター、エイズ学研究センター、発生医学研究センターの研究目的と特徴

- 1 医学部医学科では医学薬学研究部（医学系）及び医学部附属病院所属教員が、保健学科では保健学科所属教員が教育を行っている（教員 264 名）。医学部では以上の担当教員の研究活動が評価の対象であり、その目的は、（１）医学と保健学における創造的な研究活動により生命現象の真理を探究し、成果を医療の実践、疾病の予防に導入する；（２）医学、医療、保健学領域に挑戦し、医学・保健学の国際的進展に貢献する；（３）知的財産を還元し、人類の健康と福祉に貢献する；（４）医学・保健学領域で指導的人材の育成を図り、社会発展に国際的に寄与することである。
- 2 本学部の特徴は、先端的研究を行っている「発生医学研究センター」（教員 28 名）や「エイズ学研究センター」（教員 6 名）を近くに擁していることである。移植・再生医療では目的を共有する「発生医学研究センター」と連携を図り、組織・器官の形成機構に関する基礎研究と器官再建による移植・再生医療への展開をめざす。また、新興再興感染症やエイズ等の難治性感染症の発症機構の解明、診断治療法の開発研究においては、本学部の感染・免疫学関連講座が「エイズ学研究センター」と共同で研究を行う。
- 3 「生命資源研究・支援センター」（教員 12 名）は遺伝子改変マウスや生命資源情報など先端的研究資源の創出・収集を行っており、本学部における分子医学や先端科学教育研究を協同で推進する。
- 4 医学部では、研究目的を達成するため、（１）各センターと連携し拠点研究を形成・推進；（２）人材確保のため客員教授や寄附講座の設置；（３）若手研究者の海外研修プログラムの活用推進という中期目標を設定している。
- 5 大学院先導機構（機構長：学長）のもと、拠点研究 A として「細胞系譜制御研究教育ユニットの構築」「遺伝子改変モデルを用いた難病医学の展開」「エイズ等新興再興難治性感染症に対する新たな治療法開発をめざした研究教育拠点」、拠点研究 B として「バイオリカル制御による血管病変治療戦略」「新世代生命科学におけるプロテオミクス研究・教育システムの構築」「農漁村地域における環境共生手法を考慮したコミュニティ活動による生活の質(QOL)向上に関する研究」を構築している。

[想定する関係者とその期待]

本評価単位では、日本分子生物学会、日本生化学会、日本癌学会、日本エイズ学会、日本免疫学会、日本看護研究学会等の関係者を想定している。日本分子生物学会、日本生化学会、日本癌学会からは発生・再建医学や腫瘍医学の分野、日本エイズ学会と日本免疫学会からは感染・免疫学の分野、日本看護研究学会からは看護学の分野でそれぞれの研究領域の先進的な発展が期待されている。

分析項目ごとの水準の判断

分析項目 研究活動の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究活動の実施状況

(観点に係る状況)

英文論文や国際学会での研究発表の状況は、本評価単位（教員総数 310 名）で、4 年間の論文発表数は 3,273 編である。1 教員あたり年間 2.6 編の論文を発表した(資料 1 - A)。論文発表及び国際学会発表は、高い水準を維持している。

産業財産権の出願・取得状況等は、本評価単位で特許の出願数は 63 件であり、ライセンス契約したものは 8 件で収入は 5,617,480 円であった(資料 1 - B)。「エイズ等新興再興難治性感染症に対する新たな治療法開発をめざした研究教育拠点」の研究成果にエイズの治療薬として Darunavir が開発され、その臨床応用を目指している。

共同研究の実施状況は、4 年間で 179 件、受入れ金額 370,950,563 円、受入人数 60 名であり、件数、金額とも年々増加している(資料 1 - C)。

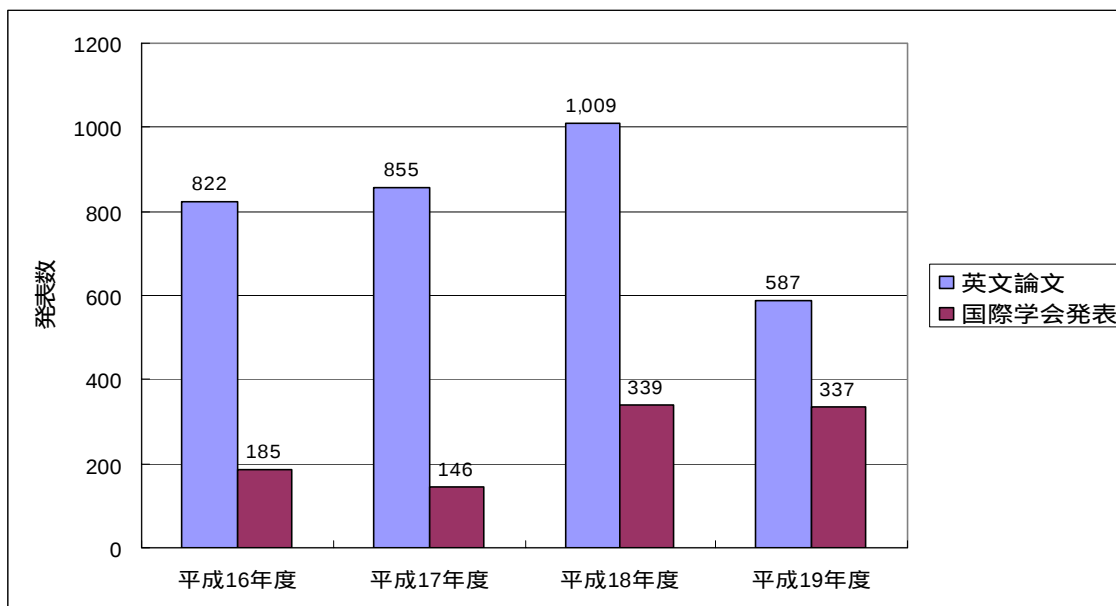
受託研究の実施状況は、4 年間で 48,034 件、1,290,971,418 円を受入れた(資料 1 - D)。病理組織検査や治験薬試験としての受託研究が多く、医学科における病理研究や臨床研究に貢献している。保健学科における受託研究の受入金額は年間 100 万から 200 万円である。

科学研究費補助金受入状況は、4 年間で 745 件内定し、総内定金額は 2,717,860,000 円であった(資料 1 - E)。医学科では年間約 3 億円、発生医学研究センターでは 2 億から 3 億の補助金を獲得している。平成 17 年度から申請件数は増加しており、特に、保健学科では科学研究費の獲得額も年々増加し、平成 18、19 年度では約 1,700 万円であった。

競争的外部資金受入状況は、4 年間で 106 件採択され、総額 1,900,377,425 円を受入れた(資料 1 - F)。医学科では年間 1 億 4,000 万円程度であり、その半分以上が文部科学省からの助成金である。平成 14-18 年度、21 世紀 COE「細胞系譜制御研究教育ユニットの構築」(総額 500,713,000 円)が採択され、高度な研究発展に貢献している。

寄附金受入状況、寄附講座受入状況は、4 年間の寄附金総額は 2,751,279,057 円であった(資料 1 - G)。保健学科では年間 200 万から 500 万円の寄付金を受入れている。寄附講座は画像診断解析学講座、感染症阻止学講座、感染制御学講座、不整脈先端医療寄附講座が設置され、生態分析医学と感染・免疫学及び不整脈の治療・研究の発展に寄与している。

資料 1 - A 研究成果発表件数（出典：全学保有データを基に作成）



資料 1 - B 知的財産権・特権（出典：全学保有データを基に作成）

部局	年度	産業財産権の保有件数	特権		ライセンス契約	
			出願数	取得数	件数	収入(円)
・医学部	平成16年度	0	11	0	0	0
・生命資源・支援センター	平成17年度	2	17	2	2	5,250,000
・エイズ学研究センター	平成18年度	2	16	0	2	91,845
・発生医学研究センター	平成19年度	0	19	0	4	275,635
合 計		4	63	2	8	5,617,480

資料 1 - C 共同研究の実施状況（出典：全学保有データを基に作成）

部局	年度	受入件数	受入金額(円)	共同研究員受入人数
・医学部	平成16年度	39	88,804,750	20
・生命資源・支援センター	平成17年度	47	66,242,223	19
・エイズ学研究センター	平成18年度	40	106,929,590	16
・発生医学研究センター	平成19年度	53	108,974,000	5
合 計		179	370,950,563	60

資料 1 - D 受託研究・受託研究員の状況（出典：全学保有データを基に作成）

部局	年度	受託研究受入状況		受託研究員受入	
		受入件数	受入金額(円)	受入人数	受入金額(円)
・医学部	平成16年度	8,946	332,677,077	1	270,600
・生命資源・支援センター	平成17年度	11,573	291,081,841	0	0
・エイズ学研究センター	平成18年度	14,145	294,044,892	0	0
・発生医学研究センター	平成19年度	13,370	373,167,608	0	0
合 計		48,034	1,290,971,418	1	270,600

資料 1 - E 科学研究費補助金（出典：全学保有データを基に作成）

部局	年度	申請件数	内定件数	内定金額（円）	間接経費（円）
医学薬学研究部 （医学系）	平成 16 年度	207	88	311,200,000	0
	平成 17 年度	229	79	335,100,000	6,060,000
	平成 18 年度	225	79	315,200,000	19,260,000
	平成 19 年度	211	90	269,540,000	47,880,000
医学部（保健学科）	平成 16 年度	19	6	5,700,000	0
	平成 17 年度	47	6	9,400,000	0
	平成 18 年度	48	11	16,900,000	0
	平成 19 年度	53	14	16,930,000	3,930,000
生命資源研究 ・支援センター	平成 16 年度	16	7	22,100,000	1,830,000
	平成 17 年度	20	8	32,600,000	0
	平成 18 年度	20	4	23,200,000	0
	平成 19 年度	18	6	28,100,000	1,140,000
エイズ学研究センター	平成 16 年度	20	5	10,500,000	0
	平成 17 年度	18	6	16,000,000	0
	平成 18 年度	14	7	23,500,000	2,280,000
	平成 19 年度	16	7	17,100,000	4,140,000
発生医学研究センター	平成 16 年度	54	27	163,500,000	5,670,000
	平成 17 年度	92	38	262,700,000	6,330,000
	平成 18 年度	86	41	271,200,000	10,650,000
	平成 19 年度	72	39	228,800,000	14,790,000
医学部附属病院	平成 16 年度	87	33	76,200,000	0
	平成 17 年度	135	42	78,700,000	0
	平成 18 年度	169	52	93,470,000	2,730,000
	平成 19 年度	154	50	90,220,000	17,940,000
合 計		2,030	745	2,717,860,000	144,630,000

資料 1 - F 競争的外部資金（出典：全学保有データを基に作成）

部局	年度	競争的外部資金 区分	採択 件数	受入金額(円)	間接経費 (円)
・医学部 ・生命資源・支援センター ・エイズ学研究センター ・発生医学研究センター	平成 16 年度	政府等の助成金	23	412,147,000	13,609,000
		うち、文部科学省	15	279,687,000	11,549,000
	平成 17 年度	政府等の助成金	23	333,958,100	29,093,900
		うち、文部科学省	13	199,195,000	24,825,000
	平成 18 年度	政府等の助成金	22	444,229,000	53,460,000
		うち、文部科学省	10	229,529,000	24,146,000
	平成 19 年度	政府等の助成金	38	710,043,325	118,489,136
		うち、文部科学省	20	424,477,325	83,166,136
合 計			106	1,900,377,425	214,652,036

資料 1 - G 寄附金・寄附講座（出典：全学保有データを基に作成）

部局	年度	寄附金（寄附講座・研究部門を除く）		寄附講座・研究部門
		受入件数	受入金額（円）	受入金額（円）
・医学部	平成 16 年度	648	518,906,272	120,000,000
・生命資源・支援センター	平成 17 年度	845	713,857,031	20,000,000
・エイズ学研究センター	平成 18 年度	882	723,244,194	20,000,000
・発生医学研究センター	平成 19 年度	1,013	795,271,560	50,800,000
合 計		3,388	2,751,279,057	210,800,000

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を大きく上回る

(判断理由)

本評価単位では、論文や国際学会での発表件数は年々増加傾向にある（資料 1 - A）。共同研究（資料 1 - C）や競争的外部資金（資料 1 - F）の受入れも増加し、科学研究費補助金の獲得（資料 1 - E）も申請数の増加に伴い、実績をあげている。保健学科では科学研究費補助金の獲得が年々増加し期待される水準を大きく上回っている。また、医学部では、寄附講座の設置が毎年増加し、研究・教育のみならず診療の面でも大きく貢献している。

21 世紀 COE「細胞系譜制御研究教育ユニットの構築」により発生学的研究に大きく貢献し、グローバル COE「細胞系譜制御研究の国際的人材育成ユニット」が採択された。拠点 A「エイズ等新興再興難治性感染症に対する新たな治療法開発をめざした研究教育拠点」によりエイズ等の感染症及び拠点 B「バイオリジカル制御による血管病変治療戦略」により生活習慣病の分野で優れた成果を上げている。生命資源研究・支援センターではマウスデータベース情報の登録及び国際的研究協力支援体制を築いており、遺伝子改変マウス研究の向上に大きく貢献している。

改善・向上の取組や活動、成果の状況は極めて良好であり、発生・器官再建医学、感染症学、生活習慣病医学及び看護学という分野の関係者の期待を大きく上回ると判断される。

分析項目 研究成果の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究成果の状況

(観点に係る状況)

学術面における優れた研究業績の判断は、資料 2 - A にしめす基準に従った。資料 2 - B に示すように、医学部での 4 年間の優れた学術業績は、SS 7 編、S 49 編であった。発生医学研究センターでは SS が 2 編、S が 14 編であった。生命資源研究・支援センターでは、SS の論文が 6 編、S の論文が 6 編発表された。エイズ学研究センターでは、S の論文が 11 編発表された。以上、医学部の生活習慣病の分野で、また先端生命医療科学部門とエイズ学研究センター及び発生医学研究センターで、それぞれ感染・免疫学及び発生・再建医学の分野での学問領域で顕著な寄与をしていると判断できる。

社会、経済、文化面における優れた研究業績の判断は資料 2 - A の基準に従っており、研究成果による社会、経済、文化面での寄与・貢献の状況は、資料 2 - B に示すとおりである。医学部での 4 年間の成果を集約すると、SS 3 編、S 3 編であった。生命資源研究・支援センターでは SS 1 編、S 3 編であり、研究が実用化や特許等の申請に大きく貢献していることを示している。

拠点 A「細胞系譜制御研究教育ユニットの構築」、「遺伝子改変モデルを用いた難病医学の展開」、「エイズ等新興再興難治性感染症に対する新たな治療法開発をめざした研究教育拠点」では、資料 2 - C に示すように、学術面における SS 及び S の論文を 2 編と 18 編、5 編と 4 編及び 1 編と 19 編発表し優れた研究業績を生み出しており、発生生物学、エイズ等の難治性感染症及び動物モデルを用いた病態解析の分野では高く評価される。また、「遺伝子改変モデルを用いた難病医学の展開」では社会、経済、文化的意義のある SS、S の論文が、1 編と 3 編発表された。

拠点 B「バイオリジカル制御による血管病変治療戦略」では SS の学術論文が 3 編、S が 13 編であり、「新世代生命科学におけるプロテオミクス研究・教育システムの構築」では SS 及び S の学術論文が 1 編と 12 編発表された。このように、生活習慣病、プロテオミクスの分野でも優れた研究業績をあげている。

資料 2 - A 研究業績の判断基準

分科名 (細目番号)		神経科学(1101～1104)、実験動物学(1201)、ゲノム科学(2301～2302)、生物分子科学(2401)、資源保存学(2501)、生物科学(5801～5807)、畜産学・獣医学(6601～6605)、薬学(6801～6806)、基礎医学(6901～6913)、境界医学(7001～7003)、社会医学(7101～7103)、内科系臨床医学(7201～7215)、外科系臨床医学(7301～7313)、歯学(7401～7409)、看護学(7501～7503)		
区分	左記区分と判断した根拠			
	学術面		社会、経済、文化面	
SS	- 研究業績を掲載した学術誌が、付表に示す「SSの基準」を満たしている。 - 同学術誌が、付表に示す「Sの基準」を満たし、かつ下記の条件の2つ以上を満たし、極めて優れた研究であると認められる論文。 - 学会・国際会議等において、当該業績に関わる招待講演、基調講演を行った。 - 当該業績が科学研究費補助金等の採択に寄与した。 - 論文の被引用回数が20回以上である。 - 同学術誌が、付表に示す「Aの基準」を満たし、かつ下記の条件の1つ以上を満たし、極めて優れた研究であると認められる論文。 - 論文の被引用回数が50回以上である。 - 当該業績が、学士院賞、卓越した水準の学会賞・学術賞・国際賞等の受賞に寄与した。		- 人の命(生命系)に関係する分野において、当該業績の利用・普及状況や地域、産業界での応用・活用状況、政策への具体的な反映状況が卓越していることから、国際的な賞、大臣表彰等による顕彰がなされている、又は、研究成果が国内のメジャーなメディア及び国外のメディアで報道されている。 - 教科書・啓発書等の出版については、権威ある書評などに取り上げられている、長期にわたり広く利用されていることから、貢献が卓越していることから、国際的な賞、大臣表彰等による顕彰がなされている、又は、研究成果が国内のメジャーなメディアあるいは国外のメディアで報道されている。	
S	- 研究業績を掲載した学術誌が、付表に示す「Sの基準」を満たしている。 - 同学術誌が、付表に示す「Aの基準」を満たし、かつ下記の条件の2つを満たし、優れた研究であると認められる論文。 - 学会・国際会議等において、当該業績に関わる招待講演、基調講演を行った。 - 当該業績が科学研究費補助金等の採択に寄与した。 - 論文の被引用回数が20回以上である。 - 同学術誌が、付表に示す「Bの基準」を満たし、かつ下記の条件の1つを満たし、優れた研究であると認められる論文。 - 論文の被引用回数が50回以上である。 - 当該業績が、卓越した水準の学会賞・学術賞・国際賞等の受賞に寄与した。		- 人の命(生命系)に関係する分野において、当該業績の利用・普及状況や地域、産業界での応用・活用状況、政策への具体的な反映状況が優秀であることから、関係者から表彰されている、又は、研究成果が国内のメジャーなメディアで報道されている、又は、実用化研究に必要な大型の競争的外部資金の獲得に寄与している。 - 教科書・啓発書等の出版については、権威ある書評などに取り上げられている、長期にわたり広く利用されていることから、貢献が優秀であることから、関係者から表彰されている、又は、研究成果が国内のメジャーなメディアで報道されている、又は、実用化研究に必要な大型の競争的外部資金の獲得に寄与している。	
Impact Factor(IF)による論文掲載誌の判断基準				
「SSの基準」		「Sの基準」	「Aの基準」	「Bの基準」
20以上		10以上	5以上	2以上
「Bの基準」の追加条件		Impact Factorが無い場合にあっては、優秀な水準と認められる査読付き学術誌を区分Bとする。		
「Aの基準」の追加条件		Impact Factorが無い場合にあっては、特に優秀な水準と認められる学術誌を区分Aとする。 具体的には、各研究領域におけるトップ3のジャーナルであれば、IFが2～5であっても、区分「A」とする。		

資料 2 - B 部局別研究業績状況

部局等名称(専任教員数)	学術的意義		社会、経済、 文化的意義		合計
	SS	S	SS	S	
医学部(264名)	7	49	3	3	62
生命資源研究・支援センター(12名)	6	6	1	3	16
エイズ学研究センター(6名)	0	11	0	0	11
発生医学研究センター(28名)	2	14	0	0	16
合 計(310名)	15	80	4	6	105

資料 2 - C 拠点形成研究等における研究業績

拠点形成研究等名称(メンバー人数)	学術的意義		社会、経済、 文化的意義		合計
	SS	S	SS	S	
細胞系譜制御研究教育ユニットの構築(10名)	2	18	0	0	20
遺伝子改変モデルを用いた難病医学の展開 (12名)	5	4	1	3	13
エイズ等新興再興難治性感染症に対する新たな 治療法開発をめざした研究教育拠点(9名)	1	19	1	0	21
バイオリジカル制御による血管病変治療戦略 (12名)	2	13	1	0	16
新世代生命科学におけるプロテオミクス研究・教 育システムの構築(14名)	1	11	0	1	13
合 計(57名)	11	65	3	4	83

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を大きく上回る

(判断理由)

本評価単位は大学院先導機構の中核を担い、優れた研究業績を学術面においても、また、社会、経済、文化面においても創出している。

「細胞系譜制御研究教育ユニットの構築」による研究業績はS以上の論文が20編であり、21世紀COE「細胞系譜制御研究教育ユニットの構築」として発生・再建医学の分野で高い評価を受けている。特に、国際シンポジウム等を通して若手人材育成という面で高い評価を受け、グローバルCOEプログラム「細胞系譜制御研究の国際人材育成ユニット」の採択に結びついた。

拠点A「エイズ等新興再興難治性感染症に対する新たな治療法開発をめざした研究教育拠点」及び拠点B「新世代生命科学におけるプロテオミクス研究・教育システムの構築」による研究業績は、S以上の論文がそれぞれ21編と13編であり、感染症分野及び免疫学での高い評価を受け、特別研究経費「臨床医学疫学研究機関連携事業」の採択に結びついた。また、「バイオリジカル制御による血管病変治療戦略」でも16編ものS以上の論文が発表され、拠点研究として大きな成果を上げた。

以上、研究成果の状況は極めて良好であり、関係者の期待を大きく上回ると判断される。

質の向上度の判断

事例 1 「細胞系譜制御拠点研究による先進的研究教育活動」(分析項目 、)
(質の向上があったと判断する取組)

拠点 A 研究を基盤とした 21 世紀 COE「細胞系譜制御研究教育ユニットの構築」により学術的に高い国際水準の研究成果を上げ、資料 3 - A にしめす中間評価では高い評価を受けた。若手研究者の育成に大きく貢献し、国内外に 25 名の優秀な研究者を輩出した。その結果、平成 19-23 年度のグローバル COE「細胞系譜制御研究の国際人材育成ユニット」の採択に結びついた。

これらのことから、発生医学分野での研究教育は大きく改善、向上している。

資料 3 - A 21 世紀 COE プログラムの中間評価

(出典:「21 世紀 COE プログラム(平成 14 年度採択拠点)中間評価結果表」から抜粋)

「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択拠点)中間評価結果表

機 関 名	熊本大学	拠点番号	A20
申 請 分 野	生命科学		
拠点のプログラム名称	細胞系譜制御研究教育ユニットの構築		
中核となる専攻等名	発生医学研究センター		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 田賀 哲也 教授 他9名		

◇21世紀COEプログラム委員会における評価(公表)

(総括評価)
当初計画は順調に実施に移され、現行の努力を継続することによって目的達成が可能と評価される。
(コメント)
リエゾンラボという特色あるシステムが活動を始め順調な進展を示している。学術研究は本来個人の発想によることから、なるべく多くの自由な時間を与えることが根本であるが、同時に複数の異なる指導者のもとで研究の実践を行うことも極めて重要である。人材養成の観点からみて、よく工夫されており、このまま継続すべきである。

◇21世紀COEプログラム委員会における評価(開示:大学限り)

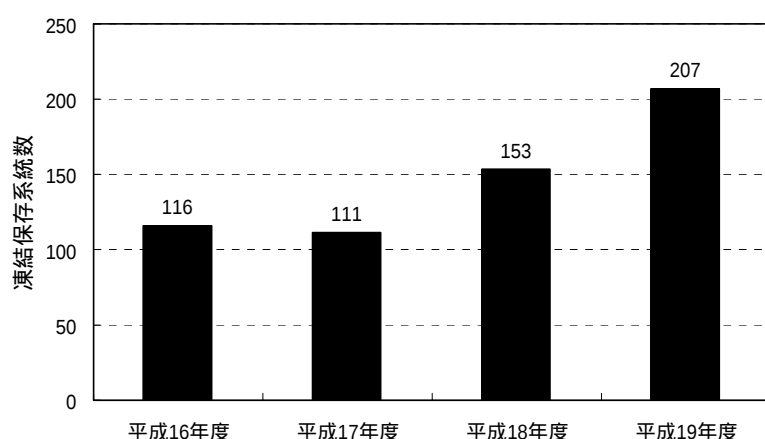
(特記事項)
本事業は地味ではあるが指導者の負担も大きいことから、見映えを気にしたシンポジウム等に気をとられることなく実質的な活動を期待する。

事例 2 「遺伝子改変マウス授受による国際的協同研究の推進」(分析項目)
(質の向上があったと判断する取組)

拠点 A 「遺伝子改変モデルを用いた難病医学の展開」では遺伝子先端分子医学で成果をあげ、凍結胚技術や凍結胚バンクの拡充を行ない、1,028 系統以上の遺伝子改変マウス胚・精子を凍結保存した。年度別の凍結保存系統総数も年々増加している(資料 3 - B)。

これらのことから、遺伝子改変マウスを巡る研究及び教育支援は大きく改善、向上している。

資料 3-B 年度別胚・精子凍結保存系統数



(出典：生命科学系事務部総務担当資料から抜粋)

事例 3 「抗エイズ薬の開発と応用」(分析項目)
(質の向上があったと判断する取組)

拠点 A 「エイズ等新興再興難治性感染症に対する新たな治療法開発をめざした研究教育拠点」では、抗 HIV 剤として Atravirine や Darunavir を開発し臨床試験へ応用した。HIV のトランスレーショナル研究として評価できる(J Virol 78:8654-8662,2004; J Biol Chem 281:12688-12698,2006; Acc Chem Res, Aug 28, 2007)。生命現象の真理を探究し、それらの成果を医療の実践、疾病の予防に導入した。本拠点は、平成 20 年度のグローバル COE に採択された。

これらのことから、感染症研究の研究教育拠点形成は大きく改善、向上している。

事例 4 「発癌機序の解明」(分析項目)
(質の向上があったと判断する取組)

Aurora A は細胞周期の分裂期に中心体・紡錘体・動源体の機能を制御しているが、過剰発現で癌を誘発するオンコジーンとして働いている(Nat Rev Cancer 5:42-50,2005; Nat Genet 37:401-406,2005)。発癌の重要な因子の解明だけでなく、細胞分裂の機構に新しい知見を与えた。

これらのことから、生命現象の真理を探究し、研究活動は高い水準を維持していると判断する。

事例 5 「免疫学の分野での先進的研究活動」(分析項目)

(質の向上があったと判断する取組)

本評価単位では伝統的に免疫学の分野で大きな業績をあげてきた。最近、高親和性抗体をもつ B 細胞選択の分子機序の解明(PNAS 101:1010-1015,2004)、新規がん特異的抗原の発見とがん免疫療法への臨床的応用、ES 細胞由来の樹状細胞による免疫制御法の開発(Clin Cancer Res 10:8630-8640,2004; Cancer Res 66:2414-2422,2006)、HIV 特異的細胞傷害性 T 細胞のエピトープ解析に実績をあげた(J Virol 79:12536-12534,2005; J Immunol 174:36-40,2005)。

これらのことから、液性免疫や細胞性免疫の分野における研究は高い水準を維持している。

事例 6 「英文論文発表による国際的研究活動」(分析項目)

(質の向上があったと判断する取組)

本評価単位では、4 年間の英文論文等の発表数は 3,273 編であり、1 教員年間 2.6 編の論文を発表し、活発な国際的研究が行われている。S 以上の論文も 4 年間で 105 編発表され、研究の質も高い。

これらのことから、国際的な研究活動を行ってきたという点では大きく改善、向上している。

事例 7 「セミナー、シンポジウムなどによる医学研究及び看護学教育活動」(分析項目)

(質の向上があったと判断する取組)

本評価単位では、医学教育部で毎年国際シンポジウムである「医学薬学生物学シンポジウム」、発生医学研究センターでは理化学研究所、京都大学再生医科学研究所との「合同フォーラム」や「発生研セミナー」、エイズ学研究センターでは「熊本エイズセミナー」などを開催している。学外からの参加者も多く、若手研究者や大学院生の啓発の場となっている。また、保健学科では熊本県母性衛生学会や看護研究学会など毎年開催しており、看護学の研究・教育に大いに貢献している。

これらのことから、医科学・医療・看護の領域での国内外における指導的人材の育成を図るという点で相当に改善、向上していると言える。

事例 8 「寄附講座の設置による研究・教育・診療活動」(分析項目)
(質の向上があったと判断する取組)

平成 19 年度には医学部等に画像診断解析学講座、感染症阻止学講座、感染制御学講座、不整脈先端医療寄附講座が設置されており、平成 20 年度には、医学部附属病院にさらに二つの寄附講座(心血管治療先端医療寄附講座と機能神経外科先端医療寄附講座)が設置される(資料 3 - C)。

これらのことから、医学や医療の分野でその研究や医療環境は大いに改善、向上している。

資料 3 - C 熊本大学医学部寄附講座一覧(出典:生命科学系事務部総務担当資料から抜粋)

設置部局	名 称	設置期間	寄附者	寄附金	設置目的
医学薬学 研究部 (医系)	画像診断解析学寄附講座 特任教授 1 特任助教 1	15.10.1～20.9.30 (5 年間)	株式会社フィリップ スエレクトロニクス ジャパン	年間 2,000 万	画像診断の基礎理論、画像情報工学領域、コンピューター支援診断の先端的研究と教育を行い、もって社会に貢献する。
"	感染症阻止学寄附講座 特任教授 1 特任助教 1	17.4.1～22.3.31 (5 年間)	財団法人化学及血清 療法研究所	年間 2,000 万 当初 1 億 一括納付	新興・再興感染症の拡大に対抗するために、微生物学的、免疫学的及び分子生物学的な広汎に用いる感染症阻止の研究を行い、もって社会に貢献する。
"	感染制御学(肥後銀行)寄附講座 特任教授 1 特任助教 1	19.4.1～24.3.31 (5 年間)	株式会社 肥後銀行	年間 2,000 万	エイズや成人 T 細胞白血病などの原因であるレトロウイルスの増殖を制御する細胞内に存在するタンパクを追求・同定し、そのタンパクによる抑制機構を明らかにすることによって社会に貢献する。
附属病院	不整脈先端医療寄附講座 特任准教授 1 特任講師 1	19.4.1～24.3.31 (5 年間)	地域の 6 医療法人及び医療機器メーカ等 7 社の合同による。	年間 2,580 万	臨床不整脈分野の先端的研究を行い、難治性不整脈治療の先導的役割を担い、もって社会に貢献する。
"	心血管治療先端医療寄附講座 客員教授 1 特任准教授 1 特任講師 1 特任助教 1	20.4.1～25.3.31 (5 年間)	医療機器メーカ等 11 社の合同による。	年間 3,000 万	心血管疾患のカテーテル治療を中心として、冠動脈をはじめとする心血管疾患に起因する難治性の心不全、冠動脈疾患の研究・治療・教育の先導的役割を担い、もって社会に貢献する。
"	機能神経外科先端医療寄附講座 特任准教授 1 特任講師 1	20.7.1～25.3.31 (4 年 9 月間)	医療法人社団北斗 北斗病院	年間 2,000 万	機能神経外科部門において、その先端治療の研究及び開発、また臨床医療への応用、また後進の研究者の育成・教育を行い、もって社会に貢献する。